第三講　論説「映画論」

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

*1小津さんはみずからの初期の作品がアメリカ映画へのただならぬ模倣であることをよく知っており、人間には新しい創造はありえないとする深い絶望を抱きつつ映画を作りつづけていたのである。もっともそれは小津さん固有の原体験というよりも、人間であれば誰しもが避けることのできない、ア物事の始まりという神話のパラドックスであった。

　われわれがひとりの個人、ひとつの個体として誕生する以前に、すでにこの世界が存在しているかぎり、新たな創造としての始まりの瞬間を人間は経験することはできない。われわれの肉体は父や母の姿かたちを模倣しているにすぎず、その差異はわずかなものでしかない。表現の主体的な手立てである言葉にしても父や母、あるいは社会の制度によってすでにあるものとして習得したにすぎない。こうした人間のたえざる模倣、反復のありように耐えきれず、個体としてのわれわれ自身に新たな始まりがありえないにもかかわらず、ありうるかのように幻想を抱き、それを聖なる始源のときと考え、みずからによる創造と思い込んでしまうのが、人間の悲しきならわしであった。

　だが小津さんはこうした矛盾にいささかも逆らうことなく、始まりのない始まりという絶望を人間に課せられた不可避の条件として受け入れたのである。*2トーキー映画としての『一人息子』を作りながら、なおも*3サイレント映画の手法にこだわりつづけたのも、映画との出会いを懐かしく追想し、聖なる始源の神話に回帰しようとしたからではなかった。むしろ模倣より始まらざるをえないという絶望をたえず思い起こすための、苦渋にみちた反復にほかならなかっただろう。そして映画の新たな技術、技法を一度は受け入れながら、やがては嫌い、断念するといったことを繰り返すのも、始まりがありえない絶望を回避せずに、たえずそれを生きぬこうとするイ小津さんらしい屈折した戯れであったのである。

　それにしても映画の原体験あるいは原風景とでも言うべきものが、なぜこれほどまでに鮮明にしるしづけられ、癒されることのない傷痕となってよみがえり、反復されるのだろうか。それは映画の基本的行為である、ウカメラのレンズをとおしてものを見るという、そのメカニズムのありように小津さんは強い欺瞞を感じたからに違いない。

カメラのレンズは人間の眼によって覗かれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事実はきびしく相反する関係にあっただろう。人間の眼の機能を、見るという言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニックな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があったのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的に見ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従って人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあっても、それは次の瞬間に新たなる運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じっと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにかを見ているという意識はなく、絵の空間の拡がり、*4タブローの表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的な陶酔はかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけである。

このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるよう

なものであっただろう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかったのである。

同じカメラによる表現でありながら、一枚の[エ]写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、その暴虐ぶりがより鮮明になるに違いない。現実にそこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見るという行為の側に立つならば、写真と絵画はまったく同質のものであっただろう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、おびただしい剰余の眼差しに支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画はそうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディアと言うべきではなかっただろうか。

かつて映画は[オ]時間の芸術という美しい名前で呼ばれた時代があった。しかもそれは時間とスピードに魅せられ、幻惑された二十世紀を象徴する言葉でもあっただろう。映画はそのフィルムのひと齣（こま）、ひと齣が、一秒間に二十四齣という眼にはとまらぬ速度で動くことによって、網膜に残像がしるしづけられ、われわれはそれを連続する映像として見るのである。そのかぎりでは映像のひと齣、ひと齣に加えられた速度、時間を停止してしまえば、映し出されているものは一枚の写真とかわらず、絵のタブローと同様にわれわれの眼が自由にそれを見ることができるはずである。

従って映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存しているのであり、それはフィルムのひと齣、ひと齣の動きのみならず、一時間、あるいは二時間と連続して映写される時間の流れを誰もが疑わず、停止しようとはしなかったからであった。そして息つく間もないスピードの表現であることが、わずか二時間たらずのあいだに人間の一生を描くことができた理由であり、神による天地創造の神話から一億光年の彼方の宇宙の物語まで映画は語りえたのである。

しかしながら映画を見るという行為は、一瞬たりとも休むことのない時間の速度にとらわれ、その奴隷と化することでもあった。静止して動くことのない絵画や写真の場合は、さまざまな視点から自由に眺めながら、みずからの内面でゆっくりと対話することもできるだろう。だが映画は一方通行的に早い速度で流れる時間に圧倒されて、ついにはひとつの意味しか見出せない危険な表現であり、二十世紀の国家権力やコマーシャリズムが濫用し、悪用したのも、こうした映画における見ることの死であっ

たのである。

それにしても小津さんは新たなメディアとしての映画が持ちあわせた特権、その魅力をことごとく否定する、まさしくカ反映画の人であったと言うほかはない。カメラのレンズをとおして現実を切り取り、それを映像化することが世界の秩序を乱すと懸念する小津さんであれば、われわれの無用な、無償の眼差しを許そうとしない映画の独占的な支配を受け入れるはずもなかった。ましてや反復とずれによって気づかぬうちに移ろいゆくのが小津さんが感じる時間とその流れであり、二時間たらずの映画の上映で人間の一生が語りつくされたり、一億光年の宇宙の果てまで旅するような時間の超スピードぶりは、われわれの眼を欺くまやかしでしかなかった。

（吉田喜重『小津安二郎の反映画』による）

注

＊１　小津さん＝小津安二郎。日本を代表する映画監督。（一九〇三〜一九六三）

＊２　トーキー映画＝音声を伴う映画。

＊３　サイレント映画＝音声を伴わない映画。

＊４　タブロー＝完成された絵画作品のこと。

問1　傍線ア「物事の始まりという神話のパラドックス」とはどのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、人間には新しい創造はありえないとする深い絶望を抱きながらも、それでもなおアメリカ映画への模倣によって映画を作りつづけなければならないと考えること。

b　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないにもかかわらず、新たな創造がありうると思い込み、それを聖なる始源のときとすること。

c　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないことを理解しながらも、無理にでも新しい創造をめざそうとすること。

d　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないことに耐え切れずに、みずからの創造を始めようとしてしまうこと。

e　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、人間には新しい創造はありえないということを理解しながらも、アメリカ映画への模倣による映画作りが創造そのものだとする幻想をもつこと。

問２　傍線イ「小津さんらしい屈折した戯れ」とは、どのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　小津安二郎は、アメリカ映画はもはや時代遅れになっていると思いながらも、自分の映画との出会いを懐かしく追想して、新たな技術や技法を取り入れることにためらいを見せ、古いサイレント映画の手法にこだわりつづけ、その立場に生き抜いたということ。

ｂ　小津安二郎は、アメリカ映画はもはや時代遅れになっていると思いながらも、自分の映画との出会いを懐かしく追想して、新たな技術や技法を取り入れることにためらいを見せ、模倣こそが安定した映画作りの道だと信じて、一貫して模倣に終始しながら映画を作りつづけたということ。

ｃ　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を取り入れることがあっても、しばらくするとそこから逃れて、つねに古い手法に回帰するということを繰り返したということ。

ｄ　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を取り入れることもあるが、しばらくするとそれに疑問を持つようになるものの、結局古い手法に回帰することなくトーキー映画を作りつづけたということ。

ｅ　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を積極的に取り入れると同時に、なおかつ自分と映画との最初の出会いを懐かしく追想しつづけたということ。

問３　傍線ウ「カメラのレンズをとおしてものを見るという、そのメカニズムのありように小津さんは強い欺瞞を感じたからに違いない」について、小津安二郎が感じた強い欺瞞とはどのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、視線を非連続なものに抑圧して、現実の世界から目を背けるようにしむけ、見るという行為に死をもたらすように強いること。

ｂ　人間の視線が一瞬たりとも運動を停止せず、非連続の状態にとどまることがないのと同様、カメラのレンズも監督の指示に従って動き、機能しているときは、人間の目と同じ働きをするが、機能を止めるとたちまち、見ることの死をもたらしてしまうこと。

ｃ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、おびただしい剰余の眼によって、限りなく拡がる世界の空間を描き出すにもかかわらず、人間の目と同等の働きをしていると思い込ませること。

ｄ　人間の視線が一瞬たりとも運動を停止せず、非連続の状態にとどまることがないのと同様、カメラのレンズも監督の指示に従って動き、機能しているときは、人間の目と同じ働きをすると思われていることから、人間の目の働きの独自性を否定するように強いること。

ｅ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、ひとつの視点にのみ集中するように抑圧しているにもかかわらず、人間の目と同等の働きをしていると思い込ませること。

問4　傍線エ「写真と映画」について、どのような違いがあるというのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、きわめて多様な眼差しを許容するのに対して、映画はあくまでも特定の視点を強要し、観客の眼差しを制限するという違いがある。

b　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画とは異なる性質を有しているのに対して、映画のほうがタブローとしての映像という点で絵画と共通性をもっているという違いがある。

c　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、特定の被写体を固定的に選ぶものであるのに対して、映画は動画としてたえず動き続ける自由さをもっているという違いがある。

d　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、人間の眼の無用な動きを否定するのに対して、映画は動画としてたえず動き続ける自由さをもっているという違いがある。

e　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、特定の被写体を固定的に選ぶものであるのに対して、映画は無数の被写体を自由にとらえることができるという違いがある。

問５　傍線オ「時間の芸術」と呼ばれる映画は、どのようなものと考えられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、時間とスピードに魅せられた二十世紀にふさわしい芸術だったが、二十一世紀になると国家権力やコマーシャリズムに悪用され、むしろ時間の速度の奴隷と化したものと考えられている。

ｂ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、ひと齣ごとに速度や時間を停止させることを通じて、一枚の写真や絵のタブローとかわらない、静止した画像として自由に見ることができるものと考えられている。

ｃ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、まさにこの速度によって成立する芸術であり、わずかの時間のうちに、人間の一生を描き、また過去の話も未来の物語も語ることができるものと考えられている。

ｄ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、ひと齣ずつ切り離して見たときは静止した写真や絵のタブローとなんらかわらず、じつはそのスピードに幻惑されていただけであったと自覚されるようになったと考えられている。

ｅ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、じつは網膜の残像としてあたかも動いているかのように思わせる芸術であり、人間の錯覚をうまく利用しただけの、いわば危険な表現というべきものと考えられている。

問６　傍線カ「反映画の人」について、小津安二郎が「反映画の人」であったというのはどういうことか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●筆者　吉田喜重＝よしだ　よししげ（一九三三〜）福井県生まれ。東京大学文学部仏文科卒。映画監督。本書『小津安二郎の反映画』は一九九九年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。センター試験でも登場。サプリの【センター現代文対策講座】第六講に収録

●小津安二郎＝おづ　やすじろう（一九〇三〜一九六三）東京深川生まれ。三重県立第四中学校（旧制）卒。戦前から戦後にかけての日本を代表する映画監督。代表作『東京物語』（一九五三年）。この作品は、十年ごとに行われている、世界の映画監督が投票で選ぶ「世界の映画史上ベストテン」にて、二〇一二年、世界一位の評価を得た

語句

神話＝しんわ→ギリシャ神話のような神様の物語。多くの人に信じられてきたけれど今では説得力を欠くことがら。本文は後者の意味

パラドックス→逆説・矛盾

主体的＝しゅたいてき→自分自身の意志で行為する様子

手立て＝てだて→具体的な方法・手段

不可避＝ふかひ→さけることができない　cf「不可欠（ふかけつ）」→かかすことのできない

追想＝ついそう→過ぎ去った日のことを思い出すこと　類義語「追慕（ついぼ）」「追懐（ついかい）」

苦渋＝くじゅう→物事がうまく運ばない苦悩　cf「苦汁」はつらい経験の意味で「苦汁をなめる」などと使う

メカニズム→仕組み・機構・からくり
欺瞞＝ぎまん→ごまかし・ウソ
総体＝そうたい→全体像・トータルなもの
休止符＝きゅうしふ→一時停止のしるし
忘我＝ぼうが→我を忘れる状態・トランス
無償＝むしょう→なんのためでもない　対義語「有償」
おびただしい＝夥しい→非常にたくさん
剰余＝じょうよ→ありあまるほどたくさん
抑圧＝よくあつ→行動や欲望を押さえつける
暴虐＝ぼうぎゃく→けた外れの乱暴
懸念＝けねん→心配する・危惧（きぐ）する

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）創造は模ホウから始まる　①放　②報　③倣　④法　⑤封

（イ）各自がコ有の個性を発揮する　①個　②固　③弧　④孤　⑤粉

（ウ）両者の衝突は不可ヒである　①飛　②否　③避　④悲　⑤誹

（エ）難題に苦ジュウの表情を浮かべる　①汁　②渋　③重　④獣　⑤従

（オ）過去の論点に回キしてしまう　①軌　②着　③来　④帰　⑤奇

（カ）対立点を鮮メイにして議論する　①明　②名　③銘　④命　⑤盟

（キ）微粒子が空間に浮ユウする　①悠　②郵　③遊　④融　⑤誘

（ク）魅惑的な作品にトウ酔する　①陶　②透　③盗　④倒　⑤頭

（ケ）異質な考え方をハイ除する　①廃　②灰　③敗　④配　⑤排

（コ）残酷にボウ虐のかぎりを尽くす　①妨　②棒　③暴　④冒　⑤膨

第三講　模範解答

問1　b

問2　c

問3　e

問4　a

問5　c

問6　無用で無償の眼差しを許さず時間の制限もある映画の独占的な支配を受け入れない映画を作ろうとしたこと。

復習問題　第三講　模範解答

（ア）③　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）④
（カ）①　（キ）③　（ク）①　（ケ）⑤　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）模倣　（イ）固有　（ウ）不可避　（エ）苦渋　（オ）回帰
（カ）鮮明　（キ）浮遊　（ク）陶酔　（ケ）排除　（コ）暴虐